

ふつ　　つ　　し　　ほり　　ぐち
富　津　市　堀　口　遺　跡

—— 一般県道君津大貫線埋蔵文化財調査報告書 ——



平成12年3月

千葉県土木部
財団法人 千葉県文化財センター

序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第379集として、千葉県土木部の一般県道君津大貫線建設工事に伴って実施した富津市堀口遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古代から中近世にいたる水田遺構が検出されるなど、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また郷土の歴史に親しむための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御労苦をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成12年3月31日

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 中村 好成

凡 例

- 1 本書は千葉県土木部による一般県道君津大貫線建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県富津市上飯野字川間3,020ほかに所在する堀口遺跡(226-007)である。
- 3 発掘調査から報告書作成にいたる業務は、千葉県土木部の委託を受けた、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査および整理作業の担当者と内容、実施期間については本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は技師 城田義友、吉野健一が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部、富津市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図 「富津」(NI-54-26-1-3)
国土地理院発行 1/25,000地形図 「鹿野山」(NI-54-26-1-4)
第2図 富津市役所発行 1/2,500都市計画図
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 9 記号やスクリーン等々の用例はそれぞれに明記してある。

本文目次

表・挿図・図版目次

I はじめに	第1表 周辺遺跡一覧	5
1 調査に至る経緯	1	
2 遺跡の位置と環境	第1図 堀口遺跡と周辺の地形	2
(1) 地理的環境	第2図 堀口遺跡と周辺の遺跡	3
(2) 歴史的環境	第3図 調査区割図	4
II 検出された遺構と遺物	第4図 005(土坑)・006(溝状遺構)	6
1 基本層序	第5図 001・002(水口遺構)	7
2 遺構	第6図 003(水田遺構)	8
(1) 古墳時代～奈良・平安時代の遺構	第7図 出土遺物(1)縄文時代	9
(2) 中世～近世の遺構	第8図 出土遺物(2)古墳時代以降	11
3 遺物		9
III おわりに	図版1 005, 006, 木製品出土状況, 水田A・水田B・水田D	12
報告書抄録	図版2 水田C・水田D, 001, 002, 遺物	巻末

I はじめに

1 調査に至る経緯

房総半島南部はかずさアカデミアパークや東京湾アクアライン、館山自動車道などの大規模な開発が多く、これに伴い住宅などの整備が推進されることにより、今後交通量の大幅な増加が見込まれている。これに対応するため君津市君津から富津市大貫に至る一般県道である君津大貫線の拡幅工事を計画した千葉県土木部から、千葉県教育委員会に対して、建設用地内における埋蔵文化財の有無およびその取り扱いについて照会があった。協議した結果、事業計画の変更が困難であることから記録保存の措置を講ずることとなった。千葉県土木部と財団法人千葉県文化財センターとの間に埋蔵文化財調査の委託契約が締結され、財団法人千葉県文化財センターが調査を実施することになった。

各年度の調査期間と業務内容、組織と担当者は以下のとおりである。

平成9年度

業務内容 発掘調査 期間 平成9年9月1日～平成9年10月31日
組織 調査部長 西山太郎, 調査事務所長 高田 博
担当者 研究員 土屋治雄

平成10年度

業務内容 発掘調査 期間 平成10年8月3日～平成10年8月7日
整理(水洗～原稿執筆の一部) 期間 平成10年8月10日～平成10年8月31日
組織 調査部長 沼澤 豊, 調査事務所長 高田 博
担当者 技師 吉野健一

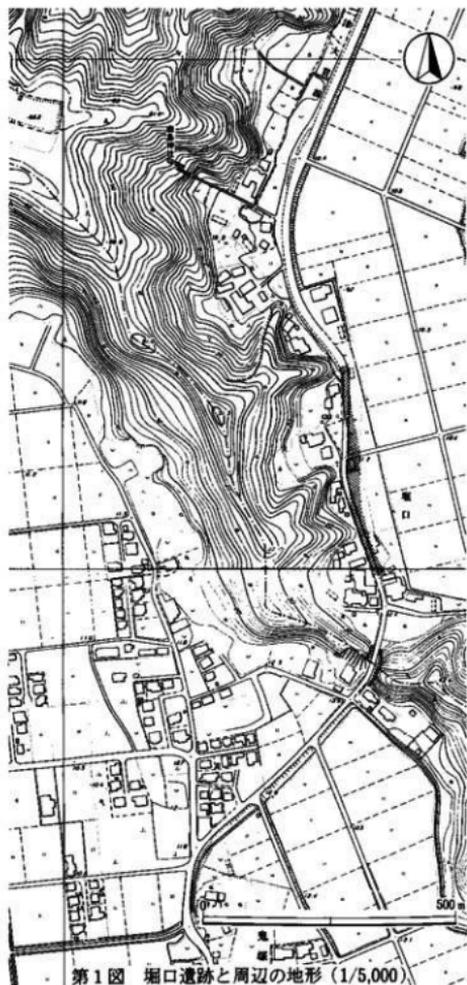
平成11年度

業務内容 整理(原稿執筆, 報告書刊行) 期間 平成11年8月16日～平成11年8月31日
組織 調査部長 沼澤 豊, 調査事務所長 高田 博
担当者 技師 城田義友

2 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

富津市は房総半島中部やや南よりの東京湾岸に位置する。市域は大きくみて北東部が君津市南端部を流れる小系川によって形成された沖積平野、南部と東部には房総丘陵が展開する。市内には小系川のほか、北から岩瀬川、入染川、湊川などいくつかの河川が東京湾に流入しており、それぞれ下流域には大小さまざまな沖積平野が広がっている。堀口遺跡は小系川下流域の沖積平野に流入する小河川が開析する小支谷の谷頭と、房総丘陵が接する部分の裾付近に立地している。本遺跡はJR内房線大貫駅の北東約2kmに位置しており、遺跡の現況は水田および宅地で、標高10m～12m、丘陵との比高差は約30mである。



(2) 歴史的環境

本遺跡の周辺には本遺跡と同時代と考えられる遺跡が多く見受けられるが、既調査のものは多くはない。遺跡の概要は調査例のあるものについて略述し、その他は一覧表にて示す。なお遺跡の番号は第1図、第1表、文献番号いずれも共通である。

まず縄文時代では、川島遺跡(12)、打越遺跡(15)、前三舟台遺跡(21)がある。川島遺跡では早期や前期、中期、打越遺跡では早期前葉の土器が出土している。また前三舟台遺跡では早期、中期、後期の土器のほか、草創期隆起線文土器と石器群が出土しており特筆される。

次に古墳時代では、川島遺跡、打越遺跡、前三舟台遺跡、大神明原遺跡(11)が集落の調査例としてあげられる。川島遺跡が後期まで継続するほかは、いずれも前期から中期を中心としており、中期以降の遺跡は減少する傾向が認められる。古墳では、図示しなかったが内裏塚古墳や三条塚古墳など著名な前方後円墳が低地部に見られる一方、丘陵平坦面が狭いという地形的な特質のためか、斜面部を中心に横穴墓が多く見られる。中には丘陵上に墳丘を持つものも発見されている。

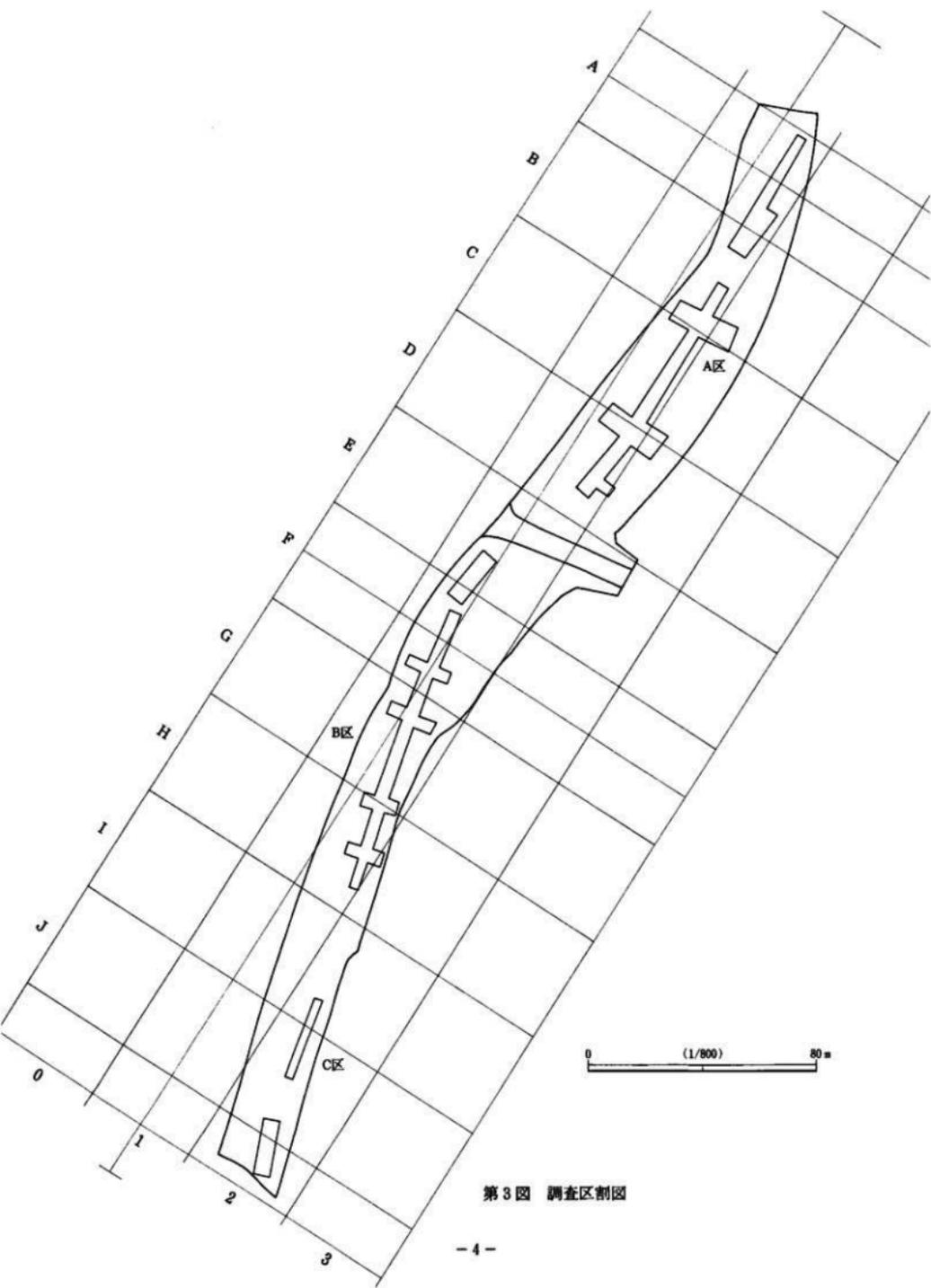
奈良・平安時代の集落で調査例のあるものは、川島遺跡のみであり、それ以前の時代と比較して極端に減少している。この時期については今後の調査例の増加に負うところが大きい。

中世についても同様である。調査例は打越遺跡で若干の遺構と遺物が検出されているほか、飯野陣屋跡(20)を挙げうるのみである。集落・生産域等の調査例の増加を待ちたい。



第2図 堀口遺跡と周辺の遺跡 (1/25,000)

1979年10月現在



第3图 调查区剖面图

No	遺跡名	種別	時代	立地	調査	備考
1	堀口遺跡			低地	今回調査	
2	吹出やぐら群	やぐら	中世	丘陵斜面		
3	下平地やぐら群	やぐら	中世	丘陵斜面		横穴墓再利用
4	内田横穴群 (鹿島横穴群)	横穴	古墳	丘陵斜面		71基。線刻壁画、埴輪片、尾根上に円形墳丘(4)あり
5	東風谷田横穴群	横穴	古墳	丘陵斜面		14基
6	岩崎横穴群	横穴	古墳	丘陵斜面		6基。尾根上に墳丘あり
7	大平山遺跡	包蔵地	縄文・古墳	丘陵上		
8	御堂谷遺跡	包蔵地	古墳	微高地上		
9	上台遺跡	包蔵地	古墳	微高地上		
10	吾妻作横穴	横穴	古墳	丘陵斜面		
11	大神明原遺跡	集落	古墳・奈良	自然堤防上	S54・S55	
12	川島遺跡	集落・墓跡	古墳～中世	自然堤防上	H2・H6	
13	諏訪神社塚	塚	中近世	微高地上		円形塚。半壊
14	かず塚古墳	古墳	古墳	微高地上		前方後円墳
15	打越遺跡	集落	古墳	微高地上	H2	埴輪片
16	神明山塚	塚	中近世	丘陵上	H2	円形塚
17	根崎遺跡	包蔵地	古墳	微高地・低地		
18	稲郷下遺跡	包蔵地	古墳	低地		
19	西飛付経塚	塚	中世	微高地上		
20	飯野陣屋跡	陣屋跡	中近世	微高地上		濠は県指定史跡
21	前三舟台遺跡	集落・墓跡・ 古戦場	縄文・古墳・ 中近世	丘陵上	S63・H1	縄文草創期隆起線文土器と石器群
22	三船砦跡	砦跡	中近世	丘陵上		
23	春日神社塚	塚	中世	台地上		
24	三舟台古墳群	古墳	古墳	台地上		円墳10基
25	小香寺院跡	寺院跡	中近世	丘陵上		
26	上1号やぐら	やぐら	中世	丘陵斜面		
27	地藏塚	塚	中近世	丘陵上		円形塚
28	近藤1号やぐら	やぐら	中世	丘陵斜面		
29	近藤2号やぐら	やぐら	中世	丘陵斜面		
30	近藤3号やぐら	やぐら	中世	丘陵斜面		

第1表 周辺遺跡一覧

- 11 野中 徹 1981 『大神明原遺跡発掘調査報告書』 富津市教育委員会
- 12 戸倉茂行 1991 『川島遺跡発掘調査報告書』 (財) 君津都市文化財センター
野口行雄 1998 『富津市川島遺跡』 (財) 千葉県文化財センター
- 15・16 酒巻忠史 1992 『千葉県富津市 打越遺跡・神明山遺跡』 (財) 君津都市文化財センター
- 20 相山林繼 1982 『飯野陣屋・稲荷口遺跡調査報告』 稲荷口遺跡調査会・富津市史編纂委員会
富津市史編纂委員会 1982 『富津市史』 通史篇 富津市
諸墨知義 1993 『千葉県富津市 飯野陣屋二の丸跡』 (財) 君津都市文化財センター
- 21 佐伯秀人 1992 『千葉県富津市 前三舟台遺跡』 (財) 君津都市文化財センター

II 検出された遺構と遺物

1 基本層序

堀口遺跡は、台地の裾部に立地しているため、台地上とは異なる特徴的な層序を示している。全体的に粘性の強い砂質もしくはシルト質の土壌からなり、台地上から流出した土砂が継続的に堆積してきた様子がうかがえる。以下に基本的な層序を示す。

表土：現耕作土もしくは、現代の盛土である。

- 1層：暗灰色砂質土。粘性があり、酸化鉄の沈着が見られる。水田耕作土である。
- 2層：明灰色砂質土。粘性があり、酸化鉄の沈着が見られる。水田耕作土である。
- 3層：灰色砂質土。酸化鉄の沈着が見られる。中・近世の水田耕作土と考えられる。
- 4層：暗灰色砂質土。酸化鉄の沈着が見られ、黒色土粒子を含む。上面に耕作痕が確認できる。
- 5層：黒色泥炭質シルト。粘性がある。上面に耕作痕が確認できる。
- 6層：灰白色粘質シルト。黒色土が混入する。耕作痕は確認されない。自然層(基盤層)と考えられる。

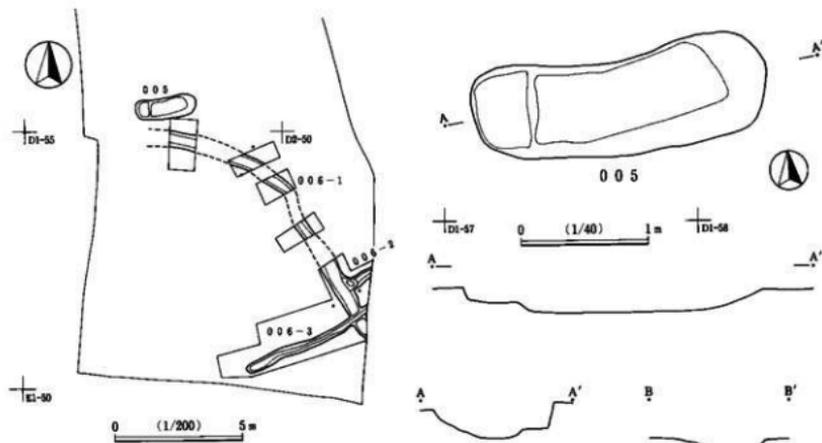
2 遺構

(1) 古墳時代～奈良・平安時代の遺構

溝状遺構3条、土坑1基が検出された。中近世水田層の基盤層の下位から検出されたため溝交差部を拡張した以外、すべて確認トレンチの範囲内である。

005(土坑)(第4図, 図版1)

全長2.3m, 幅0.75m, 深さ約0.2mである。西側に浅い棚がつく部分がある。6層上面で確認されており, 覆土は黒色泥炭質土が灰白色粘質土に混入している。



第4図 005(土坑)・006(溝状遺構)

006 (溝状遺構) (第4図, 図版1)

3条の溝状遺構は交差しているが、覆土の様子などからははっきりとした新旧関係は認められなかったため、同一時期の遺構と捉えた。006-1は北西から南東に向かって北側に大きく弧を描きながら伸びており、幅は約40cm~60cm、深さは約10cm~22cmである。断面はなだらかで、底面のレベルは北西側が高く、比高差は約26cmほどである。006-2は006-1の東側に接続しており、検出された長さが約13mである。幅は約36cm、深さは接続部で約16cm、その他の部分は約7cmである。006-3は検出された長さが約5.2mで、幅が約24cm~32cm、深さが約5cmである。006-1と南東端ではほぼ直交しており、これよりも2cm~3cmほど深い。覆土は泥炭質の黒色土に基盤層と同質の灰白色粘質土が混入しており、水が流れた痕跡は見られなかった。

これらの溝状遺構は5層(黒色泥炭質シルト層)の下位、6層(灰白色粘質シルト層)の上面で検出されている。遺構覆土は両者が混入した状態であると推測される。これらの覆土の状況や、規則的に交差する様子などから、溝の性格として、5層を耕作土とする水田の畦畔に伴う溝が考えられる。畦畔を構築するために畦畔の隅を掘削して採土する例は多い。5層上に構築された畦畔は、後世の耕作などの要因で削平されてしまったものと考えられる。

(2) 中世~近世の遺構

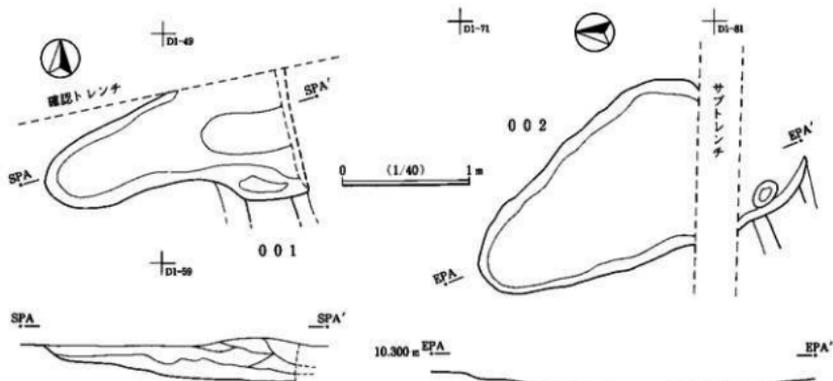
水田遺構とそれに伴う水口遺構、水路遺構が検出された。

003 (水田遺構) (第6図, 図版1・図版2)

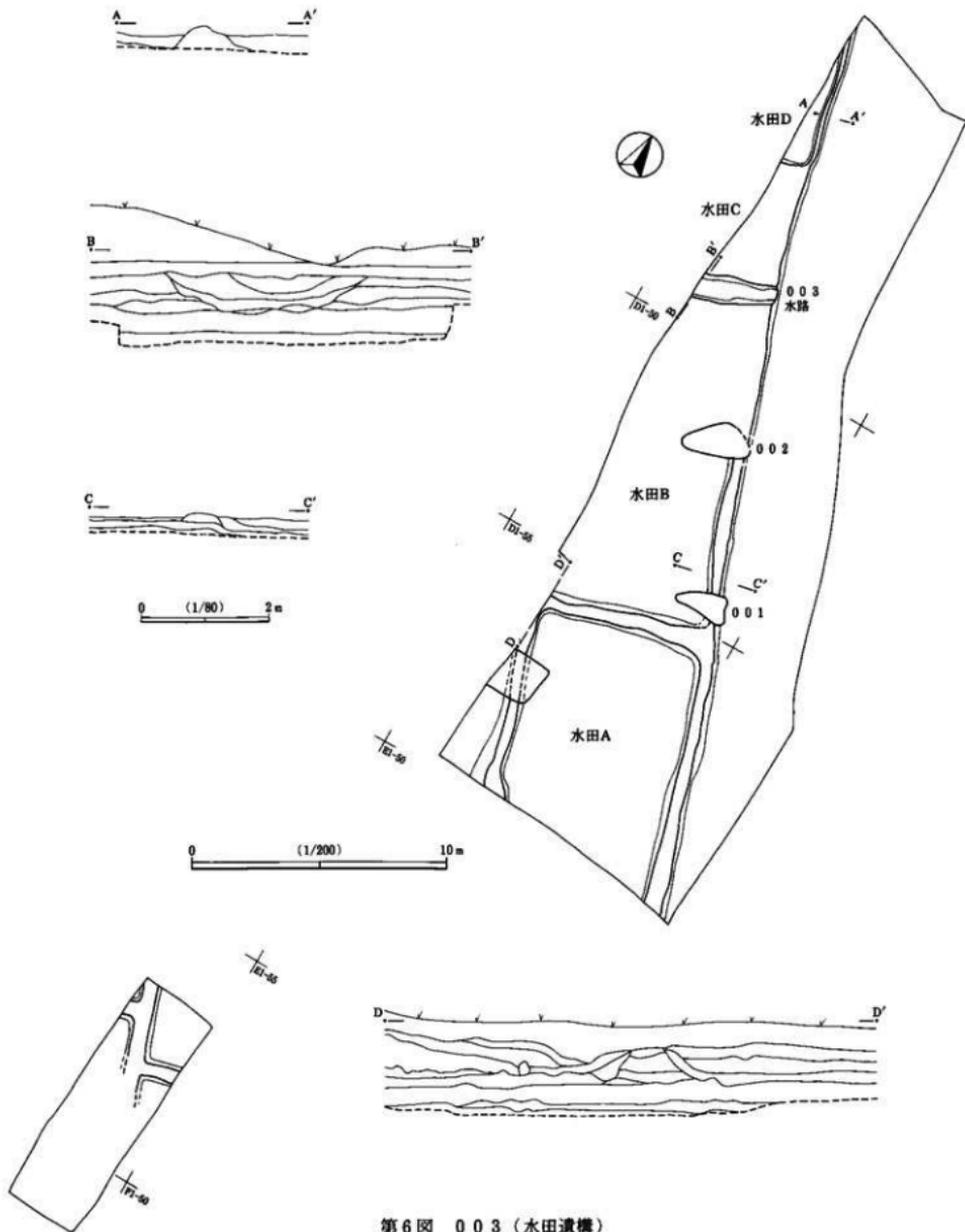
北西に振れた直線的な畦畔が3条とそれに直行する畦畔が3条検出されている。これらの畦畔により区画された水田は、1層から3層を耕作土とし、4層上面にまで鋤込みが及んでいる。水田Bと水田Cの間には003水路が検出されており、図示できなかったが水田Cと水田Bの北西側には硬化した部分が確認されていることから、畦畔として利用されていたものと推測される。水田A~水田Dの南東側には水田区画が検出されていない。

003 (水路) (第6図, 図版2)

調査区の西側は、台地の裾に面しているため、南西から北東に流れた水路であると推測される。幅1.1



第5図 001・002 (水口遺構)



第6図 003 (水田遺構)

m、検出された長さは約3.4m、深さは約30cmである。土層断面から見ると、2層上面と3層上面からの掘り込みが確認されていることから、少なくとも2度の掘削があったことが推測できる。1層は004溝を覆うように堆積しており、1層が耕作土であった時期には埋没していたものと見られる。

001 (水口遺構) (第5図、図版1)

水田Bの南東コーナーに設けられており、形状や位置から、水口遺構であると考えられる。全長2.0m、幅約1.2m (北側が欠損している)、深さ約34cmである。土層断面から見ると、灰白色砂質土を主体した砂質土が東側に傾斜するように堆積している。地形が東側に傾斜していることから、排水口であろう。

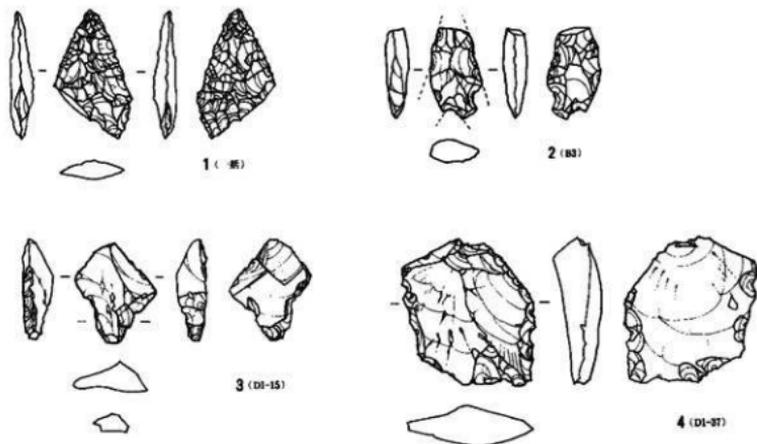
002 (水口遺構) (第5図、図版1)

水田Bの北東コーナーに設けられており、001とほぼ同様の規模、形状である。全長約2.4m、幅1.3m、深さ約10cmで、001と比較すると、掘り込みが浅い。東側に面して設置されていることから、排水口であると考えられる。

3 遺物 (第7図・第8図、図版2)

1~4は縄文時代のもと考えられる石器である。内訳は石鏃が2点、石錐が1点、大型の剥片が1点の4点が出土している。土器を伴わないため時期などは不明であるが、比較的新しい破損が見られることや、表面の風化が甚だしいことから、廃棄後、堀口遺跡に流入し再堆積したものと考えられる。

1は石鏃である。大きさは、全長31.4mm、幅18.2mm、厚さ4.9mmで、重量は1.8gである。左右両脚部が欠損している。左右側縁は直線的である。石材は黒曜石で、表面の風化は比較的軽い。2も石鏃であると考えられるが、先端と両脚部が欠損しているものと見られ、本来の形状を知るのは困難である。大きさは全長21.9mm、幅12.0mm、厚さ5.4mmである。細身に厚みがあり、石材はメノウである。3は石錐であると考えられ、先端は欠損しているものと見られる。大きさは全長24.0mm、幅20.1mm、厚さ7.0mmである。両側に



第7図 出土遺物(1)縄文時代(原寸)

は調整のような剥離が見られるが、図左側のものは比較的新しい割れであると考えられることから、他の器種である可能性も否定できない。石材は黒曜石で、表面の風化が著しい。4は細かい剥離痕の見られる剥片である。背面右側縁上部に見られる調整は本来のものであるが、右側縁下部、左側縁に見られる主要剥離面に及ぶ剥離は、後世の衝撃により生じたもので、本来のものではない。石材は黒曜石で、白色の不純物が多く混入する。表面の風化が著しい。

5は土師器の高杯で、接合部径は5.8cm、遺存部分の器高は4.1cmである。杯部は内湾しながら立ち上がり、脚部は低くラップ状にやや強く広くタイプと考えられる。全体的に磨耗が著しいのではっきりしないが、杯部内面はヘラナデ、杯部外面は斜めヘラ削り、脚部外面は縦ヘラ削りを施すものと考えられる。色調は橙色ないし黄灰色を呈する。胎土は比較的緻密で、白色粒子、砂粒を少量含む。焼成は普通である。

6はロクロ土師器の杯である。口径14.3cm、底径7.4cm、器高は4.2cm～4.6cmである。体部はほとんど湾曲せずに立ち上がり、口唇部は丸みを帯びる。体部の調整はロクロナデで外面下端のみ手持ちヘラ削り、底部は回転系切り後、周囲のみ手持ちヘラ削りを施す。色調はにぶい橙色ないし灰黄色を呈する。胎土は普通で白色粒子と砂粒を多量、白色針状物質を少量含む。内面底部には焼成後にヘラ記号が描かれている。焼成は比較的良好である。

7・8ともに有田系の近世磁器であろう。7は小壺口縁部片である。内外面に施釉されており、釉内には細かな気泡が多数含まれ、全体の色調は灰白色である。8は染付小皿の底部片である。底部の高台内には砂が付着しており、内面見込みには呉須により、ややくすんだ青色で文様が施されている。

9～14は瀬戸窯製品である。9は緑釉小皿である。内面全面及び口縁部に灰釉をハケ塗りしており、体部下端部には回転ヘラ削りが施されている。古瀬戸後期様式前半（15世紀前半頃）の製品である。10・11は連房期（17世紀代）の製品と考えられる。10は小皿口縁部片で、内面全面と口縁部に灰白色の長石系釉薬を施し、外面体部下端に回転ヘラ削りが加えられている。11は口縁部を波状に処理した小皿片で、内外面に透明感のある緑色の灰釉を施している。12は天目茶碗である。内面全面と体部外面には黒褐色の鉄釉が施される。体部下端は露胎となっており、古瀬戸後期様式（15世紀代）の製品であろう。13・14は瀬戸窯の銷輪播鉢の口縁部と底部片である。連房期（17世紀代）の製品である。

15は常滑窯大甕の口縁部片である。常滑窯編年の第10型式に該当し、15世紀後半代と推定できる。

16～20は18世紀～19世紀代の瀬戸窯製品である。16～19は灯明具で、16・17は鉄釉が、19は長石系の灰白色の釉薬が施されている。20は仏飯具の脚部片で体部内の外面には灰釉が施され、脚部は露胎としている。

21は土製の円筒状の製品で、全体の器形、大きさは不明である。胎土は明褐色から灰褐色を呈し、細砂粒を多く含む。

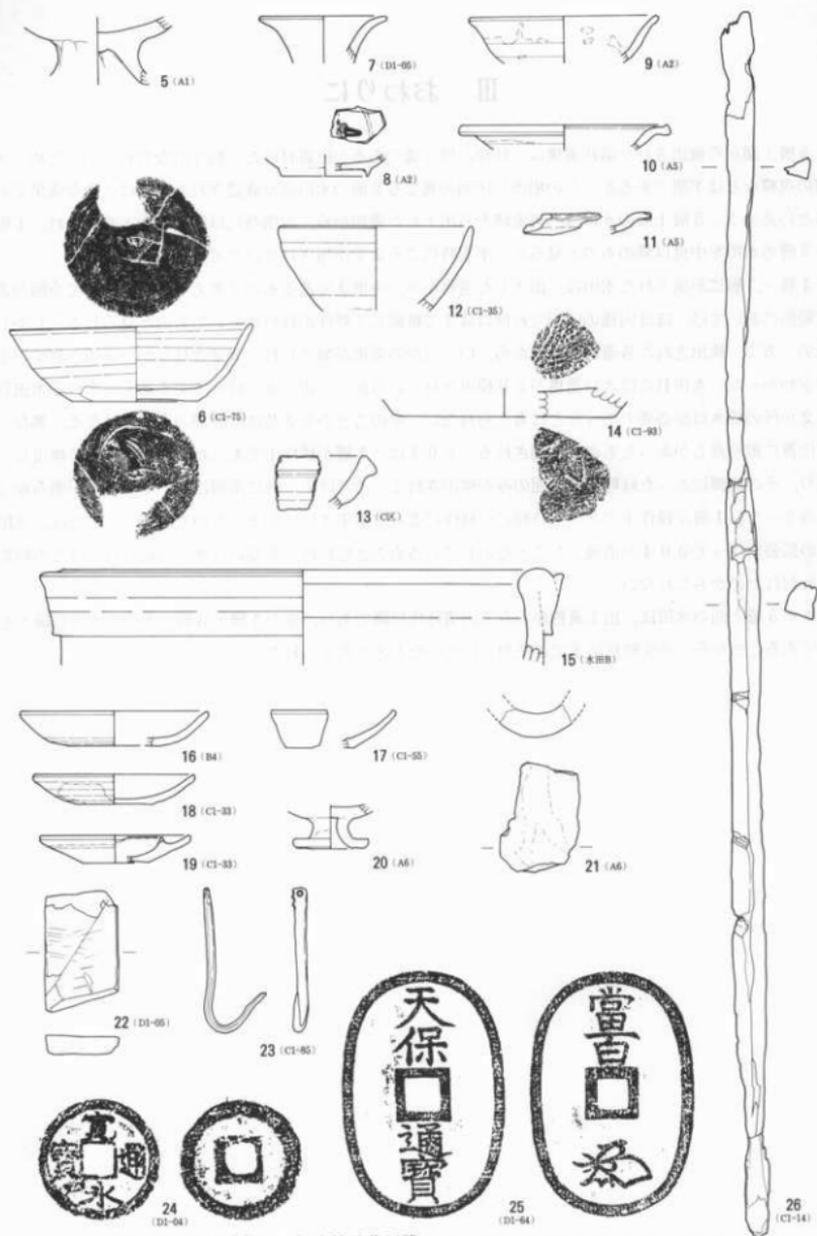
22は頁岩製の砥石である。一部が欠損しているので全体の大きさは不明である。

23は鉄製の釣針である。

24は寛永通寶の銅銭である。外縁外径24.5mm、外帯内径20.5mm、内郭外長7.5mm、孔幅6.0mm、外帯厚1.0mm、文字面厚0.3mm、量目は3.1gで、いわゆる「古寛永」と呼ばれるものである。

25は天保通寶の銅銭である。外縁外径49.0mm×32.0mm、外帯内径44.0mm×27.5mm、内郭外長10.5mm、孔幅7.0mm、外帯厚2.2mm、文字面厚1.0mm、量目は21.2gである。

26は用途不明の木製品である。



第8図 出土遺物(2) 古墳時代以降 (5~21121/3, 22・23121/2, 24・25121/1, 26121/4)

Ⅲ おわりに

5層上面から検出された溝状遺構は、畦畔に伴う溝であると位置付けた。断片的な資料であるため、水田の規模などは不明であるが、この場所に区画の異なる2面の水田面が確認されたことは大きな成果であるといえよう。5層上面の水田は、当遺跡から出土した遺物から、古墳時代以降のものと考えられ、1層～3層の水田を中世以降のものを見ると、平安時代ごろまで使用されていた可能性がある。

1層～3層に形成された水田は、出土した遺物から、中世まで遡るものと考えられる。そして今回の調査範囲においては、ほぼ同様の区画で近世以降まで継続して耕作が行われていたものと見られる。しかしその一方で、検出された各遺構の様相から、いくつかの変更が加えられ、改変されながら使用されているのがわかった。水田Bには水口遺構が2基検出されているが、一辺が8～12mであると考えられる水田Bに2か所の排水口が必要であったとは考えられない。そのことから2基は同時期のものではなく、異なった位置に掘り直しがあったものと推測される。004は、1層が耕作土であった時期にはすでに埋設しており、その両側にあった畦畔は硬化面のみが検出されているだけで、特に南側においては範囲が明らかではなかった。1層が耕作土であった時期に、耕作によって削平されてしまったのであろう。これは、水田Bの拡張に伴って004が消滅したことを示しているものと思われ、あるいは水口の掘り直しはこの時期に行われたのかもしれない。

また5層上面の水田は、出土遺物からみて古墳時代以降であり、また1層～3層の水田が中世以降のものであることから、平安時代頃までは使用されていたものと考えられる。



006 溝検出状況



006 溝完掘状況



005 土坑



木製品出土状況



水田A



水田B, 水田A



水田D



水田D断面



畦畔土層断面



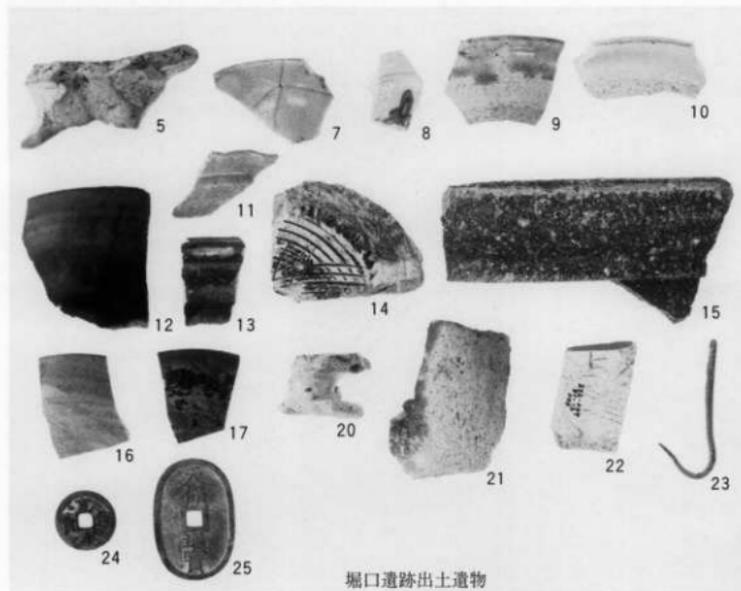
水田C, D, 水路



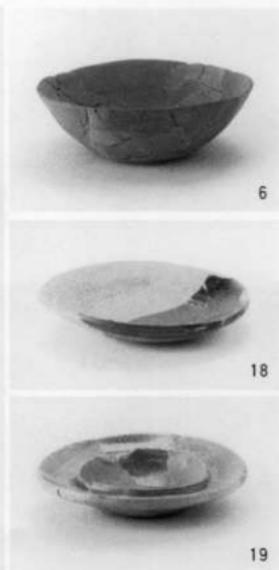
001



002



堀口遺跡出土遺物



6

18

19

報告書抄録

ふりがな	ふつつしほりぐちいせき								
書名	富津市堀口遺跡								
副書名	一般県道君津大貫線埋蔵文化財調査報告書								
巻次									
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告								
シリーズ番号	第379集								
編著者名	城田義友								
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター								
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811								
発行年月日	西暦2000年3月31日								
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号						
堀口	富津市上飯野 字上平治113-1他	226	007	35度 17分 50秒	139度 52分 31秒	19970901～ 19971031 19980803～ 19980807	1,550 479	道路建設に伴う事前調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項		
堀口	散布地	縄文 古墳 奈良・平安 中近世	なし なし 水田面 1面 土坑 1基 溝跡 1条 水田跡 1面	石鏃、剥片、石錐 土師器、須恵器 土師器、須恵器 国産陶磁器、鉄滓、鉄貨、 砥石、木製品		水田区画は水口遺構を伴う。			

千葉県文化財センター調査報告第379集

富津市堀口遺跡

— 一般県道君津大貫線埋蔵文化財調査報告書 —

平成12年3月31日発行

編 集 財団法人 千葉県文化財センター

発 行 千 葉 県 土 木 部
千葉県中央区市場町1-1

財団法人 千葉県文化財センター
四街道市鹿渡809-2

印 刷 大 和 美 術 印 刷 株 式 有 限 公 司
木更津市潮浜2-1-10